

『商い文化』

「商い文化」とは単なる熟語ではなく、厳密には東洋の「商い」と西洋の「文化」との造形熟語であり、そうした意味では東洋や西洋を超えた"人類熟語"であるといえる。

まず、「商い」の"商"とは、中国の古代王朝の殷(夏...殷...周...秦...漢~中華人民共和国)の首都の名前といわれる。現在の河南省商丘県の西南付近がその場所とか。殷王朝の歴史は湯から紂に至るまで栄えるが、644年に周の武王に滅ぼされる。

滅ぼされた後、殷の首都・商 = 殷商の人々は、王朝の首都の人間である驕り高ぶりを捨て、人々のために何かをしようとし始める。具体的な行動は、あちらの余ったモノをこちらの足りない処へ持って行くことで、自分ではなく、まず人々の幸せに努力することに表れる。

その姿は、周囲の人々から「商の人たちのお世話する姿」 『商人』といわれるようになったとか。 <大漢和辞典(大修館書店)>には、"商"のもう一つの意味として「内にあるものを外からはかり知る」と記されている。これは人々の困っている内容を察して、お世話をすることに繋がる。商行為の金銭は、結果として出てくることであるとされる。

世の老舗といわれる店は、大なり小なり、この心がけを忘れないからこそ続けられているのだと思う。ギネスブックに掲載されている関西の金剛組・石川県の法師旅館、やっと創業百年を超えたばかりの石野テントもこの仲間に加えてもらえればと願っています。

一方、「文化」とは、アメリカ語のculture イギリス語のculture フランス語のculture ドイツ語kultur ラテン語colere・cultusへと語源が遡る。意味は、「耕す」であり、あるいは「力や罰を使わずに人民を導き教えること」とされている。特に英語語源辞典によれば、「くわを入れて土地を耕す」 "こころを耕す"に転じ、修行や教養などの意味となった」とされる。

とすれば、当初は自然を人間の都合だけで耕していたものの、やがて内面のこころの熟成に向けられ、自然と人間が共生する方向に次元が上がって来たことになる。いわば、人間側の理想郷ユートピアから自然との共生のアルカディアの考え方に成長して来た訳である。

「商い」も当初は自らの反省から他者主体となり、かつ"商い" "飽きない"にも転じることで"継続"の意味も加わって来ている。「文化」も共生のこころへと熟成することで自己と他者を受け入れることになったことは、東洋・西洋を問わず人間であったという幸せになるのではないだろうか。

ミトコンドリア・イヴという言葉がある。人間のDNA遺伝子を生物学的に辿り上ると20万年前のアフリカに住む一女性が、現在の人類の共通の祖先とされるとか。人類は皆家族である訳になる。

『商い文化』はそうした人類の目指すべき基本的姿勢であると信じたい。

[2010.03 石野]